慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	R・ペースイブリッヂ著『ソヴエト政治の鍵』: 反党グループに因る危機
Sub Title	R. Pethybridge : A key to Soviet politics
Author	中沢, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.8 (1963. 8) ,p.93- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19630815-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と白（バイエルンの旗）以外の旗をかつぐように要求してみるがよろしい〃という意味なのではあるまいか。たしかに、改訳の余地は、ないでもないように思われる。編者と二人の訳者とが口を揃えていうように、「若い法律家のたましいを法学に親しませる最良の方法は、彼らに偉大な法律家の伝記を読ませることであ」り、そのためにフォイエルバッハ伝が適切だというなら、書籍そのものを（せめて原著の程度に）小さく軽いものとすることのほかに、訳文も、総じて、もつともつと易しい言葉で綴らるべきであつたろう。

だが、出来上つたものを前にして、瑕瑾を見出し、註文をつけることは、すこぶる易しい。問題は、誰が最初に〃日本の文化財〃に一書を加えるかということである。

人は、原著なしに、この訳書をよんで、充分にフォイエルバッハを知り、その時代を知り、神の摂理を知ることができる。人は、日本語によつて、叡智に与り、感動を覚えることができる。これは、翻訳の成功といわなければならない。指摘した瑕疵およびこれに類する瑕疵が、仮に指摘者側の正しくして、真実瑕疵であつたにしても、瑕瑾は、しかく、小さな瑕瑾にすぎない。

原著が優れた作品であることは既に言つた。訳書は、かくて、〃日本の文化財〃に、美事な拡がりを附加したものといえる。

菊池、宮沢両教授のこの訳業は、まことに立派な仕事であつた、と私は考える。（写真のほか、前置二八頁、序および目次六頁、本文三二二頁、後置三八頁、索引一〇頁。東京大学出版会発行。九八〇円）

（伊東　乾）

R. Pethybridge: A Key to Soviet Politics

The Crisis of the Anti-Party Group
Frederick A. Praeger, New York, 1962, 209 pp.

R・ペースイブリッヂ著『ソヴエト政治の鍵』

——反党グループに因る危機——

一九五六年二月の第二〇回党大会の終幕におけるいわゆるフルシチョフの秘密演説がその年の六月にアメリカ合衆国の国務省によつて公けにされた直後、この秘密演説を論評したI・ドイッチャーは、党大会開会当日のフルシチョフの演説とその一〇日後になされた秘密演説とを比較したときに見られる両者の著しい差異・対照から、党および国家の最高指導者層内部における権力闘争の新たな局面への発展を予見していたが、事実、その後間もなく権力闘争は極めて明白な姿で現われている。すなわち一九五三年三月スターリン死後のクレムリン内部における権力の系列化・闘争が集団指導制の装いの下に進行し、一九五七年の六月にその最終段階に達した。当時すでに首相（閣僚会議議長）と党書記（書記局委員）のポストを失

つていたマレンコフを中心とする反フルシチョフ・グループが六月一八日の党中央委員会幹部会において攻勢に転じ、幹部会委員の圧倒的多数を擁して、フルシチョフを窮地に追いつめたのであり、権力闘争の頂点をかたちづくるこの「六月危機」をR・ペースイブリッヂが「ソヴエト政治の鍵」において取上げ、ソ連における公式の発表・記録から得た素材と、ポーランドの新聞 Tryburna Ludu のモスクワ通信員M・ルッキイおよびイタリヤ共産党機関紙 L'Unitá の記者G・ボッファの伝える資料から、「六月危機」の背景を考察し、その全貌を明かにし、その後の展開を観察している。

党および国家の最高指導者層内部の権力闘争の分析によるソヴエト政治への接近、すなわち「クレムリノロジー」Kremlinology は政策論争にたいする権力闘争の優位を前提として成立し、またそのかぎりにおいては貴重な成果の提供を期待することができるが、かかる分析に批判の余地がないわけでもない。たとえば、利益集団は常に機能的に把握され、企一的に類型化され、また党および国家の中枢機関に、あるいはその周辺に送りこまれた利益代弁者・個人と利益集団との結びつきは個人のキャリヤによつて図式的に固定されがちである。勿論著者は、著書の表題に示されているように、ソヴエトの政治を本質的に規定する結論を性急に求めてはいない。「六月危機」の全貌を具体的にさぐることによつてソヴエト政治への、まさしく一つの手懸り key を用意しようとするところに、著者の企図がある。したがつて、クレムリノロジカルな分析一般にたいするとと同様の批判の若干が本書にもまた与えらるべきか否かの問題を措いて、本書の概要を記すことが、この場合当を得た紹介ではないかと考えられる。

一九五三年以前の背景　一九五七年六月当時の党中央委員会幹部会を構成していた一一名の委員――フルシチョフ、マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチ、ブル・ガーニン、ミコヤン、ヴォロシロフ、ペルブーヒン、サブーロフ、スースロフ、キリチェンコと二名の委員候補――シェピロフ、ジューコフがそれぞれいかなる利益集団の代弁者であつたか。またかかる利益集団の発言力・強さがスターリン死後いかに変化したかを理解するために、分析を一九五三年以前にさかのぼらしめると、党アパラチキイ Party Apparatus、政府官僚 Government Bureaucracy、経営技術者エリート Technical Élite、軍 Army という四種の利益集団（秘密警察については一七、三七頁参照）の存在と、経営技術者エリートと軍に比較して党アパラチキイと政府官僚が、また政府官僚に比較すると党アパラチキイがより強い利益集団であつたことが判明する。しからば前記した幹部会のメンバーはいかなる利益集団と関連していたか。彼等のほとんどすべての者は党アパラチキイとしてのなんらかの経験をもつてはいるが、この集団にはフルシチョフ、キリチェンコ、スースロフ、シェピロフが、政府官僚にはマレンコフ、モロトフ、カガノヴィチ、ブルガーニンが、経営技術者エリートにはミコヤン、ペルブーヒン、サブーロフが、また軍にはヴォロシロフ、ジューコフが結びつけられるという。すなわち著者は特定の個人が一個の利益集団に必ずしも限定され得ない事実も尊重し、また党員としての経歴ス

ターリンとの関係なども考慮しつつ、一応、前記のような分類・整理を果して、一九五三年以後の幹部会における党アパラチキイの比重・発言力がスターリン時代のそれよりもさらに減退していた点を強調する。

危機の根源　著者はまずスターリン死後の党および国家の首脳部人事に注目する。スターリンの地位は、三月六日の党中央委員会総会と最高会議幹部会と閣僚会議との合同会議の決議により――実はそれ以前になされたベリヤとの私的な取極めにより、マレンコフによつて継承された。彼は幹部会ならびに書記局の筆頭委員であると同時に閣僚会議議長（首相）となり、また、彼を議長とし、四名――ベリヤ、モロトフ、ブルガーニン、カガノヴィチの第一副議長から構成された閣僚会議幹部会が発足したが、その後間もなく、党もしくは国家のいずれかのポストの空渡しを余儀なくされて（三月七―一四日の間に）、彼は「スターリンの推定相続人としてかち得た力を維持するためのよりよい装備は、国家機構への依拠によつて得られる」（四六頁）という確信から党書記を辞任し（幹部会の委員としては引続き在任した）、中央委員会はフルシチョフを党第一書記に選出した（九月）。そして一九五五年一〇月にはマレンコフは首相を辞任し、フルシチョフの推挙したブルガーニンがその後を継いだ。しかし「六月危機」の主役達は権力の座をめぐる闘争に純粋に終始していたわけではない。この間、彼等の間には農業、経済、外交にかんする政策論争が展開されていたのであり、この事実を無視して「危機の根源」をさぐることは危険であるという。かくして、著者は論争を引起した諸政策の内容、論争点、その政治的な意味を一つ一つ吟味し、さらにまたレーニングラード事件、フルシチョフの秘密演説の投じた波紋を観察して、フルシチョフとマレンコフ、モロトフ、カガノヴィチ、ブルガーニン、ペルブーヒン、サブーロフ、シェピロフとの敵対的関係の時点と内容をつきとめ、その背後に存在した諸利益集団間の、特に党アパラチキイと政府官僚との対立を読取る。

闘争　反フルシチョフ・グループとの闘争はいかに展開されたか。そこに著者は次に指摘するような四つの段階を認める。すなわち第一の段階では、反フルシチョフ・グループが一九五七年の六月一八日に開催された幹部会において攻勢に出て、農業、経済、外交にかんする彼の政策を全面的に批判し、彼を支持した委員は僅かに二名――ミコヤン、キリチェンコを数えるにすぎなかつた（スースロフは中立の立場をとり、反フルシチョフ・グループはマレンコフ、モロトフ、カガノヴィチ、ブルガーニン、ペルブーヒン、サブーロフ、ヴォロシロフの七名を数えた）が、第二段階では、フルシチョフが委員候補ジューコフの助力によつて、問題の決著を、党アパラチキイがすでに多数を占めていた中央委員会総会の討議に持込むことに成功し、六月二二日に開催された総会において反フルシチョフ・グループの敗北が決定的となつたと。

勝利　ついで七月三日にはじまる第三の段階では、最高指導者層内部の対立、反フルシチョフ・グループの存在が公けにされ、彼等を反党グループと規定して、まずマレンコフ、モロトフ、カガノ

ヴィチにたいする批判と攻撃が向けられており、そして最後に、反党グループの処分が問題となつた第四の段階が出現しているという。

余波　無論、「六月危機」の落著後反党グループは幹部会から一掃された。新しい幹部会では、委員および委員候補が増員され、しかも委員一五名の内の一一名をまた委員候補九名の内の六名を党アパラチキイが占めるに至つた。すなわち政府を代表する委員もしくは委員候補は僅か五名――閣僚会議議長のブルガーニン、副議長のミコヤン、ジューコフ元帥、閣僚のペルブーヒンとコスイギン――にすぎず、党アパラチキイと政府官僚との比率は「六月危機」以前の幹部会のそれと逆になつた。書記局の幹部会にたいする、したがつてまた政府にたいする統制は保証され、一九五八年三月にはフルシチョフがブルガーニンに代つて閣僚会議議長すなわち首相となり、党アパラチキイの政府にたいする支配が確立した。しかしこのことは、かつての反党グループが政治の次元から完全に一掃されたことを意味してはいない。一九五七年六月の中央委員会総会の決議は反党グループの党からの除名を要求していたが、第二二回党大会の決議にはそのような要求は見当らない。またモロトフは自己の敗北を最終的には認めてないし、一九五八年一二月にブルガーニンが、一九五九年春にペルブーヒンとサブーロフがそれぞれ用心深い告白をなした以外、反党グループのメンバーは一人として自己批判を行つてはいないと。それ故、著者は、フルシチョフと反党グループとのかかる複雑なからみ合いに改めて光を当て、そのことによつて、現実のソヴエト政治への豊かな手懸り・鍵を提供して行く。

（二）三気付いたところであるが、四一頁五行目の and the NVKD.' は and the NKVD.' の、九三頁五行目の the Japanese newspaper Asaki Shimbun, は the Japanese newspaper Asahi Shimbun の誤植であり、また九頁九行目の all members of the Soviet Presidium の Soviet は除かれるべきであろう。）

（中沢精次郎）

Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft

73. Bd. 1961.

『全刑法雑誌』七三巻（一九六一年）

一　本巻には一〇篇の論文が登載されている。即ち、第一分冊にグリューンワルト「医師の告知義務」、第二分冊にイェシェック「ベーリング以後のドイツにおける犯罪概念の展開――オーストリアの学説と比較して――」、ラング＝ヒンリクセン「責任思想の危機」、第三分冊にアルトゥール・カウフマン「患者の同意によらない治療行為」、ジェローム・ホール「刑法理論」、ルドルフ・シュミット「一九六〇年草案における賄賂罪の構成要件」、ヘルマー「傾向犯と職業犯」、第四分冊にゲルケ「訓令拘束性と基本法」、ファイゲ「自由